My crazy friend

soir

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｍｙ　ｃｒａｚｙ　ｆｒｉｅｎｄ

【Ｎコード】

Ｎ６８４６Ｕ

【作者名】

ｓｏｉｒ

【あらすじ】

人間不信少女と不登校少女のドタバタ学園ライフ！！

My crazy friend

私の友達の山下ナオミははっきり言って変わっていると思う。
友達である私でさえそう言っているのだからそうとう変わっている
に違いないだろうね。

私は高校一年の吉川麻美。あまり人間が好きではない。
だからあまり人とかかわりを持とうとしないから、いつも一人で行
動している。
一人で行動しているからと言って、クラスメイトに興味がないとい
うわけではないし一応、顔と名前はしっかり覚えている。

でも、ナオミちゃんの名前と顔は二学期の終わりごろまで知らなか
った。
なぜなら、彼女は不登校だったのだ。

そんな彼女がある日突然学校に来た。

あの日は確か初雪が降った日だったと思う。私はいつも７：００に
は教室にいるため、校舎内は静かだったが、あの日はもっと静まり
返っていた。たぶん雪のせいで電車とかが遅れているからだろう、
そんなことを考えて教室に入ると、私の席に見知らぬ少女が座って

いた。その少女は髪の毛を高い位置でツインテールにして、ゴスロリ風のリボンで結んでいた。教室という空間では明らかに異質な存在だ。

「あの、そこ私の席なんですけど・・・」
「あれ、座席表で確認したのに～。間違えちゃったみたい。ごめんね～。おわびにこれ受け取って。」
差し出したのはカリカリ梅。ポケットからカリカリ梅を取り出す女子高生って・・・と思ったけど相手の好意を無駄にしたら悪いからとりあえず受け取った。

「ところであなた誰？」
「山下ナオミだよ、不登校の。」
あっさり言いのけた。なんかすごい子だなぁ。
「私は吉川麻美。山下さんは何で学校来たの？」
「いや～。いま、親にパソコン取り上げられちゃってさ。自分で買うお金が無いし暇だから学校来ちゃったw　あ、あと私のことは『ナオミちゃん』って呼んでね。」
そしてカリカリ梅をおいしそうにほおばる。
「そうなんだ～。あ、そうそう私のことは『麻美』って呼んで。」

こうして私たちは少しずつだが会話を交わすようになった。
それまで人とのかかわりを持とうとしなかった私が、だ。何故だろうね。

おそらくナオミちゃんの性格のせいだと思う。ナオミちゃんはこのような独特の性格のため、いろいろ問題行動を起こしそれを見てい

るのがたのしくて仕方が無いので、私はナオミちゃんが好きなのだ（たぶん）。
例えば、ナオミちゃんは授業中にも関わらず、ヘッドフォンデで音楽を聴きながら授業を受ける。（体育の授業は除く）
当然先生は怒るが、無視されてしまうので最近は先生もあきらめている。かわいそうに。

でも、あきらめない先生もいる。ある日、学級日誌を持って職員室に行くと学年主任（体育）の先生と数学の先生がナオミちゃんのヘッドフォンのことでいろいろ話し合っているのが聞こえた。謹慎処分にするって聞こえたが…効果はあるのだろうか？

さらにナオミちゃんは授業中にもカリカリ梅を食べている（体育は除く）。食べるのは勝手だが、あの「カリカリ」という音がはっきり言って迷惑だね。
クラス全体が「やめろ」という目で見ているのにもかかわらず、やはり無視。

ナオミちゃんに何をいっても無駄だ。こういうの馬の耳になんたらって言うよねー。

ナオミちゃんが変な行動を起こすと考えると、面白いけど、私の平穏なスクールライフが邪魔されてしまうかもと考えると邪魔だ。
でも、もう少しでクラス替えだ。この学校は１０クラスある。
ナオミちゃんはぜんぜん学校に来ていないんだから、留年のはず。

まい　くれいじー　ふれんど（前書き）

ひらがなばっかりで読みづらいかもしれません。
ごめんなさい。
ナオミちゃんはひらがなしか読み書きができないんです。

まい　くれいじー　ふれんど

あーつかれたつかれた
ひさしぶりのがっこうだったなぁ

そーいえばぶろぐこうしんしてないな
やばいやばい
すいっちおん

ぱそこんくん、さいきんおそい
はやくはやく

やっとたちあがった
さー、こうしんこうしん

【たいとる：　ひさびさのがっこう】

きょうはひさしぶりにがっこうにいきましたー
６かげつぶりぐらい？
ゆきふっているひにいくじぶんってｗｗｗ
しかも、あさの７：００ぐらいについちゃった
たいくつすぎてどーしよーってこまっていたら
しらないおんなのこ（まぁくらすめいとのかお
だれもしらないからあたりまえか）が

はいってきたのー

けっきょくそのおんなのことなかよくなれたとおもうんだけど・・・
なーんか、かわっているんだよねー
きょくたんなはなし『へんじん』ってやつ？
なにがかわっているのかわからなかったけど・・・
まぁ、またほうこくするね☆

My crazy friend (2)

待ちにまった新学期！！
世間ではそう思う人が多いんだろうけど、私はそう思わない。
だってどのクラスに入っても人とかかわりを持たない私には関係ないの。

いつもと変わらない通学路。私は毎朝最寄り駅から学校まで２０分以上かけて歩く。今の時期はいいけど、夏は暑いし冬は寒くてさんざんだ。―――まぁカップルにとっては長く一緒にいられるからいいかもしれないが。いいなぁリア充、爆発しろ！！そんなことを考えていると学校に着いた。無駄に段数の多い昇降口の階段を上るとドアに新クラスが書かれている紙が張り出されてた。
自分の名前を探す。中学のときと比べて人数多いから探し出すのに時間がかかってしまう。あった！！６組だ。出席番号は４５番つまり一番最後。それだけ確認してとっとと新しいクラスへ私は行った。

教室に入った私は驚愕した。なぜかって？ナオミちゃんがいたからだ。
「おっはよー麻美♪」
「・・・お・・・おはよー」
まさか同じクラスなの・・・！？

「よかったー麻美と同じクラスで。」
「う・・・うちもだよ」
言葉とは裏腹に私の頭の中は混乱中。つかなんで留年じゃないねん。
「なんででしょうねw当ててみて。」
うざっ。まぁ暇だから相手をしてやるか。
「実は留年なんだけど間違って2年の教室に来たとか。」
「はっずれー。ちゃんと進学しましたよん。」
期末テスト数学6点じゃなかったっけ？
「・・・賄賂とか？」
冗談で言ってみた。
「あったりー」
あったりーじゃなよ。賄賂とか反則じゃん。
「うちんちってさーお金持ちだから、学校にたっくさんお金寄付しててさー。だから進学できるのさ。」
そういうことか。私たちが通っている高校は私立の高校で、お金欲しいがためにお金さえたくさん払ってくれれば誰でも入れちゃうんだよね。ちゃんと勉強している人に対して失礼なのでは？と思うが気にしないことにする。
「っていうことで今年もよろしくー。」
とびっきりスマイル炸裂。この笑顔が私を不安にさせるんだよ。また1年間、バクバクしながら生きていかなければならないのか・・・。

その後登校してきた新しいクラスメイトの様子を観察していると意外なことに去年のクラスメイトが多いことに気づいた。名前を覚える手間が省ける。

始業のチャイムと同時に担任が入ってきた。見たこと無いやつだ。

見た目からすると４０代ぐらい？
「麻美ー。あの先生ズラっぽくない？」
ナオミちゃんの席は私の右斜め前だったので話しかけてきた。そういわれてみればズラっぽい。
「ナオミちゃん。そういうことは言わないほうがいいよ。」
「ほーい。」

「みなさん、おはよう。今日から一年間君たちの担任なる石塚です。よろしく。」
そしてチョークを取り出し、きちんと掃除してある黒板に自分の名前を書き始めた。
「下の名前は益次です。あと教科は数学だから。」
スーツに着いたチョークの粉を払いながら言った。几帳面なヤツなのかもしれない。

その後は宿題回収や始業式をやってもう解散。こんなことのために学校に来る意味などない気がする。

「麻美ー。今日一緒に帰らない？」
「いいけど。」
「よっしゃ。」
かばんに荷物をつめると私たちは歩き出した。
「明日ってさ、委員会決めやったあとに授業だよね。」
「そうだね。」
委員会決め・・・。めんどくさいな。私は毎年学級委員やらされる。迷惑でしょうがない。私が何も岩なそうだからってみんな私にめんどくさいこと押し付けてずるいし卑怯だ。
「麻美はなにやるの？やっぱり学級委員？」

「学級委員は嫌だ。」
「えー。麻美にぴったりだと思うんだけどな。」
似合う！？意味が分からない。
「麻美ってしっかりものだから。みんな麻美に頼ってるんだよ。」
違う。だから押し付けているんだよ。
「ナオミは風紀委員やろうかなー？」
「やればー」
もう、私は適当に相槌を打つしかできなかった。怒りで自分をコントロールできなくて。
明日が来なければいいのに。

まい　くれいじー　ふれんど（2）（前書き）

一応設定ではナオミちゃんのブログにしてるんですけど分かりづらいですよね・・・

まい　くれいじー　ふれんど（2）

【たいとる：　くらすがえ】

きょうはくらすがえがあったよん
ともだちとおなじくらすでよかったー（´∀｀）
ともだちまだなんかへんなんだよねー
めをみてはなしてくれないよんｏｒｚ
なんでだろうね

それでさーあたらしいたんにんのせんせいがぜったいかつらｗ
べつにはげてるんだったらそのままにしておけばいいのにね
かつらせんせいってよぼうかな↑

あしたはいいんかいとかきめるんだってー
ふうきいいんやろうかなー

んじゃまたね（´∀｀＊）ノシ

My crazy friend（3）（前書き）

学級委員ってめんどくさいですよね。もうこりごり。

My crazy friend (3)

ぴぴぴぴぴ・・・
私を至福の時間から現実に呼び戻す目覚まし時計が鳴り響く。あー
あ、もう朝か。

「学校サボりたいな・・・。」

まぁ、そんなこと親が許すわけがないので布団から出て朝食と弁当
を作りに台所へ行く。
歩きながらふと考えた。なんで私はこんなにいやいや生きていかな
ければならないのかね。めんどくさいよとも思う。けれどそれを考
える時間が無駄なのでここらへんで強制終了しますか。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊
＊　＊＊＊　＊＊＊
あっというまに委員会を決める時間が来た。

「それでは、委員会をきめましょう。最初に男女1人ずつ委員長を
決めてもらって以後はその2人にまかせるからよろしく。」
要するに先生はめんどくさいのね。それで私に余計な仕事が増える
から止めて欲しいんですけど。

「んじゃーまず、委員長やりたい人はいるか？」

いるわけないじゃん。いたら明日は雪降るよ。

あたりを見渡すとみんな黙り込んで教室はシーンとしている。休み時間のあのにぎやかさはどこに消えてしまったのだろうか。

「積極的になりましょうよ。」

・・・なんでそこまで立候補にこだわるんだよ。

「せんせーい！！」

ナオミちゃんが手をあげた。授業中に手を挙げたこと無いのに・・・。きっと明日は台風が来るね。

「はい何ですか？」

「私、学級委員長やりまーす。」

訂正。明日は空からブタが降ってきます。クラスの空気が凍りついたね。そりゃー変な子に学級委員やられたらたまんないだろうね。ついでに先生も凍り付いてる。

「え・・・君、大丈夫？」

ついでに先生は去年もこの学校にいたのでナオミちゃんの問題行動についてよく知っている。

「大丈夫だ。問題ない。」

いや問題ありまくりだから。

先生はしばらく考え込むと

「まぁ本人が平気って言っているし・・・みんないいよね？」

うなずく子、わずかにうなずく子、リアクションをとらない子もいたが反論する声が無かったので結局ナオミちゃんが女子の学級委員になった。そして私は風紀委員をやることになった。意外なことにナオミちゃんは上手く委員会決めを進めていたよ。

委員会決めが終わるとすぐにナオミちゃんは話しかけてきた。
「学級委員の仕事ウチにあってるかもー。」
「よかったね。つか昨日風紀委員やるって言ってなかった？」
「・・・気が変わったの。１回ぐらいやってみたかったし。」
「そっかー。」
私のことを思ってとかじゃないのね。
「それもちょっとあるかも。去年の麻美、ちょっと嫌そうにやっていてかわいそうだなぁと思ったから。」
「・・・ちょっとトイレ行って来る。」
そしてトイレの個室に入り鍵をしめたとたん涙があふれてきた。
分かってくれていた人がいた嬉しさで感極まって。
「この涙はしばらく止まりそうもないな。」

My crazy friend（3）（後書き）

コメントくださいな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6846u/

My crazy friend

2011年11月16日16時55分発行